

日本都市学会第51回大会「大学と地域社会」

大内 田鶴子

2004年10月15日から3日間、千葉県銚子市において、第51回日本都市学会が開催された。本年は開催地当番が関東都市学会であり、銚子市に受入をお願いした。後援：銚子市、協賛：全国市長会・財団法人東京市政調査会・財団法人日本都市センターの協力をいただいた。

社会・経済・技術の変化の中、大学全入時代を迎え、高等教育機関の見直しが迫られている。都市あるいは、地域の視点から見ると、大学は重要な社会資本・都市基盤として、不可欠な知的インフラストラクチャーである。本大会では、大学人の研究発表と、地域社会を代表する方々の研究発表を交流させ、「大学にとって地域社会とは何か」「地域社会にとって大学とは何か」の議論を重ねた。

野平市長の特別講演「地方自治体と大学」では、大学誘致にかかった財政負担と市の財政構造の分析に基づき、誘致の効果、適用起債の種類、償還の見直しなどの説明が行なわれた。つづいて大内が本大会のテーマ設定の背景や意義について基調報告し、シンポジウムでは「大学と地域社会の連携」について議論を戦わせた。ゲストの山崎墨田区長は、大学立地のない自治体の立場から、大学や行政どちらか一方が大きく負担しない方法での、活性化への学生の活用について、商店街活性化など具体的取り組み状況を述べた。千葉勝氏は、リゾート法後の「企業誘致・公共事業」としての大学誘致の側面を批判し、地域が大学を活用しなければ投資効果は期待できないことを強調した。檜植貢氏は、墨田区長の区からの持ち出しなしの大

学との協働について反対意見を述べ、学生や教員の立場から見ると資金の提供も自治体に期待したいと述べた。

部会に分かれた研究発表のなかで、「大学と地域社会」発表会場では、「イギリスの大学都市の地域計画」、「廃校の危機に瀕した大学の再生と地域力」、「カナダにおける大学と地域社会」、「町衆を育てる地域の大学」、「都心の大学キャンパス」の報告が行なわれた。

その他の自由参加のテーマとしては、一日目「都市の経営と権限」部会、「都市の産業とインフラ」部会、「土地利用」部会、二日目は「都市の過去と未来」部会、「コミュニティと支援」部会、「都市居住」部会、「地域づくりの手法」部会で、全体で37テーマの発表と討論が行なわれた。

なお、本学会は会期の初日か最後に受入地域の見学が組込まれることが恒例になっている。銚子市では江戸時代より操業しているヤマサ醤油工場、一両編成の銚子電鉄、犬吠崎、外川漁家集落を見学した。地元の郷土史家とガイドボランティアの協力を得て実施された。醤油醸造業と並んで、戸川漁家集落も江戸時代中期に和歌山県南岸から房総半島に移住してきた人々により構築されたものでまだその子孫が漁業を営んでいる。当時外川千軒と呼ばれるほど繁栄し、井戸、排水溝、碁盤の目状の街区など都市計画の遺構が残されている。銚子半島が和歌山県人の植民地であることなど、同じ千葉県内に勤務していてもなかなか知らない興味深い事実があるものだと感心した。